

## 〈小特集…古今集一一〇〇年によせて〉

### ●古今集への途

#### 万葉から古今へ

— 国風暗黒時代をめぐる一つの解釈 —

山崎 健司

二〇〇五年は古今和歌集が撰進されて一一〇〇年、新古今和歌集の撰進からは八〇〇年にあたる記念の年。熊本でも肥後細川家の祖・藤孝（幽齋）が古今伝授に関わりをもち、現在水前寺成趣園に「古今伝授の間」が移築されている縁から、「古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム」が開催された。十月から開始されたプレセミナーも含めて約一ヶ月間にわたり、古今集を学ぶ機会が設けられたわけだが、地方都市でのこのような催しは空前絶後のことであろう。

○ さて、その古今集の成立は、万葉集の年代の知られる最後の歌から約百五十年後にあたる。その間は和歌が文学史の表舞台から退いてしまったように見られ、吉澤義則によって「国風暗黒時代」と命名されて以来、暗黒の時の流れのなかで、万葉から古今へと歌風が一変したかのような印象

を与えている。

いつ、誰によって命名されたのかは知らぬが、万葉集と古今和歌集、それに新古今和歌集を併せて「三大歌集」と称する。高校の「国語」の教科書にはそれぞれの歌集から代表的な作品が採られている。以下に示すのは、教科書に載る各歌集に関する説明である。

#### ・万葉集（まんようしゅう）

我が国に現存する最古の歌集。二十巻。約四千五百首。編者・成立年代は明らかではないが、最終の整理には大伴家持が当たり、奈良時代末期にはほぼ全巻が完成していたと見られる。作者は天皇・貴族から庶民に至るまで国民各層に及び、素朴な感情が率直に表されている。

#### ・古今和歌集（こきんわかしゅう）

最初の勅撰和歌集。二十巻。約千百首。九〇五年（延喜五）、醍醐天皇の勅命を受けて、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑が撰進した。素材や感情の直接的な表現を避けた理知的な発想に特色があり、その優雅流麗な調べは以後の日本文学の美意識の重要な一面を形作ってきた。

#### ・新古今和歌集（しんこきんわかしゅう）

勅撰和歌集の第八番目。二十巻。約二千首。一二〇五年（元久二）後鳥羽上皇の院宣によって、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経らが撰進した。絵画的・

象徴的歌風で、技巧が多く用語が洗練され、「万葉集」「古今和歌集」とともに和歌史上、歌調の三典型の一つを成している。

右は、現在実際に高校で使用されている古典の教科書からの引用であるが、今から三十年ほど前、わたくしが高校時代に使用した教科書においても右の内容は記されている。俗に十年一昔と言うが、三十年といえは一世代の違いである。この間、国文学の研究はずいぶん進歩を遂げたはずなのに、教科書の記述はあまり代わり映えがしない。無難と思われるところでまとめるところになるのだろうか。

もっとも多くの高校では検定済教科書の他に、『国語便覧』等の副教材を生徒に持たせている場合が多い。そこには教科書に記載されていない、より詳細な記述や新しい研究成果が盛り込まれる場合も少なくないが、ことと歌の項に関しては、大学入試に出題されることが稀なため、歌が好きなら先生でもなければ授業の中で取り上げられることはまずほとんど無いらしい。せいぜい三大歌集に関する歌風を比較する位で先に進んでいってしまうようである。

このような事情が反映してか、万葉歌と古今集の歌は断絶していて、異質な世界を形成していると信じ込んでいる向きが多い。だが、本当にそうだろうか？ 次の例を参照されたい。

I 梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降

りつつ(万葉 ⑤八二三) 大伴百代

i 春霞たてるやいづくみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ  
(古今 春上三) 読人しらず

II 冬過ぎて春し来れば年月は新たなれども人は古りゆく  
(万葉 ⑩一八八四) 作者不明

ii 百千鳥さへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり  
ゆく(古今 春上二八) 読人しらず

III 藤波の茂りは過ぎぬあしひきの山ほととぎすなどか来  
鳴かぬ(万葉 ⑭四二二〇) 久米広縄

iii わがやどの池の藤なみさきにけり山郭公いつかきなか  
む(古今 夏一三五) 読人しらず

IV 雲の上に鳴きつる雁の寒きなへ萩の下葉はもみちぬる  
かも(万葉 ⑧一五七五) 作者不明(一説に高橋安麻呂)

iv 夜をさむみ衣かりがね鳴くなへにはぎの下葉もうつろ  
ひにけり(古今 秋上二二一) 読人しらず

(本文は万葉集は角川文庫、ただし歌番号は旧国歌大観、古今集は岩波文庫による。)

右は I と i、II と ii、……という具合に、内容と表現が類似する万葉歌と古今集歌とを対比させながら並べたものだが、つとに安田喜代門『古今集時代の研究』(一九三二)は万葉と古今とでこのような類想の関係にある歌の組を右の四組を含めて計三十一組指摘している。

安田氏も指摘しているが、万葉歌との類似が見られるも

のほとんどは古今集読人しらずの歌で、作者が明らかかな歌としては紀貫之五首、紀友則・素性各一首の計七首のみ。前の二人は撰者、素性は彼らとほぼ同世代の歌人で、この三人の歌の場合、語句や格調に多少万葉歌との類似点があるに過ぎない。ここから古今集読人しらず歌は万葉歌に近く、作者分明歌とは性格を異にしていることが浮かびあがってくる。

以上のような実態をふまえ、古今集歌を歌風によって「読人しらず時代」「六歌仙時代」「撰者時代」の各時代に区分することは国文学の世界ではすでに常識に属し、かつては教科書にもここまでは説明がなされていたように記憶する。ところが、前に掲げたものを含め、現行の教科書ではこの部分の説明は省かれ、辛うじて『便覧』の類に載っているに過ぎない。さきに「変わり映えしない」と記したけれども、これは明らかに退歩である。

○ さて、そうすると万葉歌と古今集歌のあいだに断絶を見るのは正しくなく、【万葉歌十古今集読人しらず歌】と【六歌仙十撰者時代の歌】とのあいだに断絶を見るべきだ、ということになる。

実は万葉集終焉歌（巻第二十巻末、天平宝字三年〔七五九〕正月一日の相伴家持の作）は、作歌時には新帝淳仁天皇の時代への予祝を意図してうたった天平宝字三年正月の

歌を、後に編纂の段階で「より広い意味における聖武朝の終焉」と捉えなおして万葉の巻末歌としたのであった（山崎「万葉集巻第二十の編纂をめぐる」『萬葉集研究』第二十七集、二〇〇五）。家持による万葉集編纂の営みは彼の晩年桓武朝初期（七八一〜三）まで続けられていたことが知られており、このことは（聖武朝に重きをおく）編纂上の意図によって、万葉集に収録されなかった終焉歌以降の歌が少なからず存在していたことをうかがわせる。

一方、古今集には未収録だが、桓武朝以後の歌として、

古の野中古道あらためばあらたまらむや野中古道（延暦一四年〔七九五〕四月曲宴和歌）桓武天皇

今朝の朝明なごといひつる霍公鳥今も鳴かぬか人の聞くべく（延暦一五年五月曲宴和歌）同右

この頃の時雨の雨に菊の花散りぞしぬべきあたらその香を（延暦一六年十月曲宴和歌）同右

今日の日の池のほとりに霍公鳥たひらは千代と鳴くは聞きつや（嵯峨朝弘仁四年〔八一三〕南池行幸唱和歌）

藤原園人

霍公鳥鳴く声聞けば歌主とともに千代にと我も聞きけり（同右）嵯峨天皇

など、断片的に記録された歌が知られている。右の第三例で万葉集には見られない菊花と万葉末期にわずかに見られる香が歌われているのは素材の新しさという点で注目され

るが、いずれも対象を実態に即して詠む万葉的な歌いぶり  
で古今集読人しらず歌の表現に近い。他方、六歌仙のひと  
り僧正遍照の出家前の歌として知られる、

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよをとめの姿しばしとどめ

む（古今 雑上八七二）

は、仁明朝「八三四〜八五〇」の宮廷行事で詠まれた六歌  
仙時代の早い時期のもので、この歌には舞姫を天女に見立  
てたり、雲の通路を雲を吹き寄せて閉じてしまえと雲を擬  
人化して命令したりと、古今集歌の表現の特徴とされる技  
法がすでに凝らされている。いわゆる古今集の表現をもつ  
歌は六歌仙の登場以降と捉えてよい。

以上、万葉終焉歌から古今集成立までの約一五〇年を  
「暗黒」Ⅱ「空白」と見るのではなく、上流にあたる万葉の  
側からはその流れをくだり、河口にあたる古今の側からは  
遡って空白を埋めてみようかと試みた。その結果として、完  
全には空白は埋められなかったけれども、一五〇年を二〇  
年ぐらゐまで縮めることは出来る。そのどうしても埋めら  
れない二〇年とは漢詩文が和歌を圧して隆盛を極めた、『凌  
雲（新）集』（八一四）、『文華秀麗集』（八一八）、『経国集』  
（八二七）の勅撰漢詩集が作られた時代にそのまま重なって  
いる。これこそがより厳密な意味での「国風暗黒時代」と  
いうことになる。

古今集の表現といわれる見立てや擬人法、縁語・掛詞・

歌枕を多用する、素材や感情の直接的な表現を避けた理知  
的な発想は、まさしく漢詩文の発想法に根差すものであり、  
いかに漢詩文の影響が大きかったかがうかがえよう。

和歌の復活は、漢詩文隆盛時代の後、藤原氏が摂関政治  
を確立していく過程で後宮の比重が高まり、女性が中心と  
なった場で和歌がもてはやされるようになったことによる  
とされる。遍照・在原業平・文屋康秀・小野小町ら六歌仙  
は、そのような和歌復興の時期に活躍した歌人たちで、そ  
れぞれが豊かな個性を開花させた。それに続く世代にあた  
る古今集の撰者たちは、和歌を漢詩と対等な地位にまで引  
きあげようとした。その結果、対象を観念的に捉えて表現  
するようになる。折しも屏風絵の世界を歌に詠むことや、  
歌合も盛んに行われるようになる。かくて、撰者たちの目  
指した表現は、実態に即して対象を捉える万葉の歌風から  
大きく離れることになった。

このようなダイナミックな歌風の展開は、国風暗黒時代  
の洗礼があつてこそ可能であつたということは、もつと強  
調されてよい。ほかならぬ古今集撰者たち自身、その時代  
以前の読人しらず時代を「古」、以後を「今」と捉え、対比  
させながら「今」の歌のあるべき方向性を示している。両  
者のあいだに横たわるものへの関心は小さくない。

○

以上、国風暗黒時代を厳密に漢風一色に染まった時代と

して、その時期を特定しながら意義を述べてきた。しかし、和歌が詠まれなくなるという事実は、ある時期に突然起こるものではなく、たとえ嵯峨天皇みずから先頭に立つて「文章経国思想」による漢詩文奨励の政策が採られたということがあったにせよ、そのような政策を実現するには環境の整備が必要である。とすれば、いかにして漢風謳歌の風潮が始まったかを考えていくことも、忘れてはならない視点であろう。

先ほど引用した古今集未収録の桓武朝以後の例はいずれも宴席で詠まれていることが分かるが、曲宴和歌とは宴のたけなわに天皇によって歌い出され、時季にかなった風物を詠みつつ君臣唱和して宴を閉じる形式、すなわち二次会的なくつろいだ雰囲気のなかで詠まれているという特徴がある。多くの場合、一次的な場面では和歌ではなく、漢詩が詠まれていたことも知られている。そして、記録されたものは天皇御製とこれに応じた高官の歌ばかりで、他に歌が詠まれていたかどうかは分からない。

そのような事実をふまえて、あらためて振り返ってみると、実は万葉集の歌が詠まれていた頃からすでに漢風謳歌の風潮はあったのではないか。万葉集の歌が詠まれていた頃、それと並行する形で作られた漢詩文は『懐風藻』に収録されているが、宮廷での侍宴・従駕（『行幸供奉』の場面では——文学的達成度はともかく——、歌よりも漢詩の

方が重んじられていた形跡が認められる。

万葉集はたまたま最終の段階で大伴家持が関わっていたことにより、あれだけの威容を誇る歌集となったという見方もできる。彼が関わっていないかつたとすれば、少なくとも家持の日記的な歌巻である巻第十七く巻第二十の部分は無かつたかもしれないのだ。そう考えていくと、巻第二十のなかにしばしば見られる、宴席で「未奏」もしくは「未誦」に終わった家持の歌などは、漢詩の披露が優先された事実を反映しているのかもしれない。万葉末期の歌は家持が孤軍奮闘して命脈を保っているだけで、実際には漢詩が圧倒的に優勢であったという可能性も否定できないのである。

今一度、万葉末期にあたる時代の文学的情况を、万葉集の外側に目を向けて冷静に読み直していくならば、将来この時代の文学史の記述がガラッと変わることもあるかもしれない、その際には国風暗黒時代の捉え方にも修正が求められることになろう。

注 本稿は、平成十七年（二〇〇五）一〇月二日、県民交流館パレ  
アで行われた「古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム」プレセ  
ミナー（第一回）において筆者が行った講演の内容に加筆したもの  
である。